

金沢城内の井戸跡に関する基礎的調査

宮川勝次 西田郁乃

はじめに

金沢城は、天正11年（1583）の初代利家入城後、前田家により約300年間・14代にわたる居城であったが、廃藩後は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和20年まで第九師団や歩兵第六旅団、歩兵第七連隊が駐留した。戦後は文部省の所管となり金沢大学のキャンパスとして利用されてきた。平成8年以降は県の所有地となり、金沢城公園として整備が進められてきた。この間の旧陸軍による城内の改変やその後の大学キャンパス整備等により、城内には地表に露出した井戸側や原位置から移動した井戸枠が各所に点在している。

本稿では現時点での視認できる井戸跡や井戸枠等の部材について、現況を子細に観察し、可能なものは実測図を作成するなどして、その形態的な特徴や使用方法等に関わる痕跡、石材種等の情報をとりまとめ、今後の調査研究に資する基礎資料とすることを意図したものである。

取り上げる資料は、現存する井戸跡4基（～）、発掘調査で検出した井戸跡4基（～）、枠の部材3基（～）（第1図・1表）の計11基である。

なお、井戸枠と井戸側の名称、形式等については、宇野隆夫氏の形式分類〔宇野隆夫1982〕に拠り、井壁の崩落を防ぐために地下に設置する部分を「井戸側」、地上に設置する井筒等を「井戸枠」とする。

1. 現存する井戸跡

数寄屋敷の井戸跡（第2-1～5図）

二ノ丸西方の一画である数寄屋敷の南縁に位置する。現況は、近代に建てられた旧歩兵第六旅団司令部庁舎の裏手にあたり、井戸跡は埋められずに、板状のコンクリートで蓋がされている。

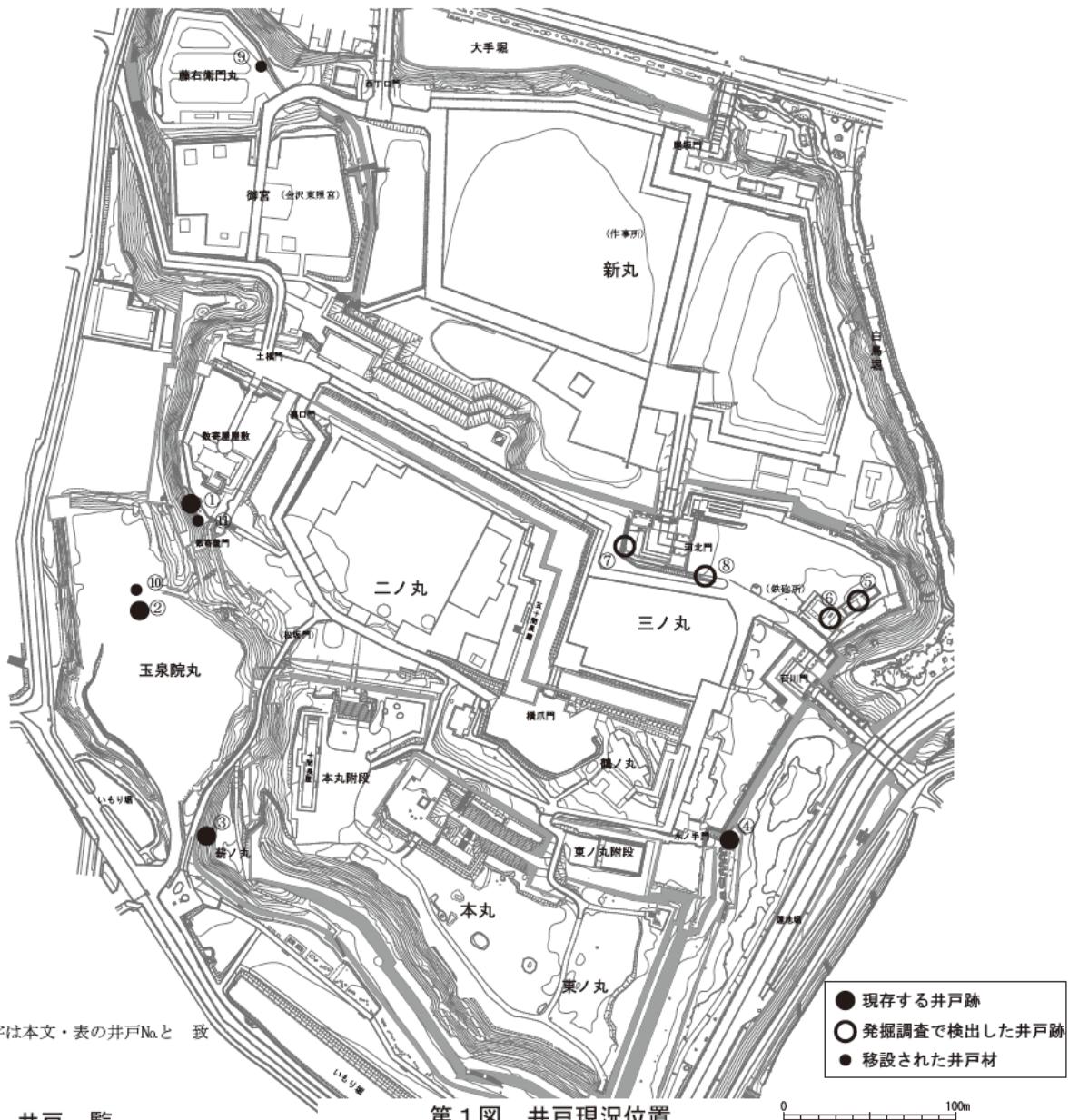
井戸側は、赤戸室石の板石を8石組み合わせた八角形（第2図-4）であり、外径119cm、内径103cm、現況の深さは井戸側上面から、水面まで18.6m（標高約27.0m）、底まで20.8m（標高約24.7m）を測る。段数については、計測可能な最上段の板石の高さ65cmを基準に、底の深さから割り返すと32段積み上げていることになる。板石同士は密接に組み合わされ、上下段の石の縦目地はわずかにずれている程度で、基本的には1辺1石の構造となっている。

1石の寸法は、外幅48～50cm、内幅42～46cm、厚さ8cmを測り、内側がやや狭い台形状を呈する。上端部は、上部の井戸枠との組み合わせのため、外側を0.5cm程度浅くなるように削り込み、内側に段（第2図-3）を作り出している。接合面の仕上げは加工痕が残る雑なところと平滑できれいな部分がみられる。井戸側外面は地中に埋まり確認できないが、内面は相対的にきれいな印象を受ける。材の遺存状態は、上端部で一部ヒビ割れが認められるが、比較的良好である。

井戸跡周辺には板材（第2図-5）が散乱している。長辺73～82.5cm、短辺30～40cm、厚さ8～10cmの板材の一辺を橢円形に湾曲させて割り貫き、接合面となる側辺の端部を削り込んだもので、これらの板材は形状や加工等から井戸枠周囲に設置された敷石材の一部と考えられる。

玉泉院丸の井戸跡（第3図）

玉泉院丸の中央部やや北寄りに位置する。軍隊期には馬小屋の井戸として利用されており、最近まで井戸側上部にはコンクリート製井戸枠が設置されていたが、現在は、玉泉院丸庭園の整備に伴いコンクリート製枠が撤去され、かつて数寄屋敷西側の金沢大学職員会館前にあった井戸枠（）が据え置かれている。



第1表 井戸一覧

第1図 井戸現況位置

番号	形式		石材	位置	法量(cm)				深さ(m)	備考
	井戸枠	井戸側			外径	内径	高さ	厚さ		
①		板石組 (八角形)	安山岩(戸室石)	数寄屋屋敷	119.0	103.0	65.0	8.0	18.6	20.8 1石の幅は内42~46cm・外48~50cm 水面:標高約27.0m、底:標高約24.7m コンクリート板で蓋 現存
②		削り貫き	凝灰岩(鷹巣石)	玉泉院丸	127.5	97.0	70.0	15.0		6.2 底:標高約27.7m 現存
③		削り貫き	凝灰岩	薪ノ丸	126.0	97.0	90.0	15.0		現存
④	削り貫き	石組	捨:凝灰岩(鷹巣石) 側:河原石・安山岩(戸室石)	水ノ手門	135.0	115.0	115.0	10.0	3.9	5.4 井戸枠1段85.0cm・2段30.0cm 水面:標高約34.4m、底:標高約32.9m 「御乳母之池」(文献) 現存
⑤		削り貫き	凝灰岩	三ノ丸 (北東部)	130.0	95.0	100.0	18.0		1.0以上 発掘調査(平成10年) 近代
⑥		石組	河原石	三ノ丸 (北東部)	130~150 180(掘方)	90~95			0.6以上 発掘調査(平成11年) 17世紀中頃	
⑦				三ノ丸 (河北門)	170×180 (掘方)				2.2以上 発掘調査(平成18~20年) 17世紀後半廃絶	
⑧				三ノ丸 (河北門)	305×280 (掘方)				発掘調査(平成18~20年) 17世紀後半~近代初	
⑨	削り貫き		安山岩(戸室石)		160.5	106.5	76.5	27.0		旧金大教養部中庭(新丸)
⑩	削り貫き		安山岩(戸室石)		139.5	103.5	73.0	20.0		旧金大職員会館前(数寄屋屋敷)
⑪	板石組 (円筒形)		安山岩(戸室石)		126.0	92.0	77.0	17.0		1石の幅は内33~43cm・外43~54cm 旧歩兵第六旅団司令部庁舎(数寄屋屋敷)

※深さは井戸側の上面から計測し、水面・底は現況の灌水面と井戸底を指す。

井戸側は、凝灰岩（鷹巣石）を割り貫いた円筒形（第3図-7）をしており、外径127.5cm、内径97cm、厚さ15cm、現況の深さは井戸側上面から、底まで6.2m（標高約27.7m）を測る。最上段の井戸側の高さ70cmを基準に、底の深さから割り返すと8・9段積み上げていることになる。遺存状態は、井戸側外面から内面にかけて、縦方向のヒビ割れが3箇所程度確認できる。井戸側上端部には、コンクリート製井戸枠を固定するための釘及びその痕跡が、内端部から約5cmの位置に、ほぼ等間隔に10箇所（第3図-2,3）確認できる。外面には全体的に幅広の鑿加工痕がみられる。

薪ノ丸の井戸跡（第4図）

薪ノ丸の西端部に位置する。明治40年頃、旧陸軍により御花畠やいもり坂等の造成が行われ、郭周辺が著しく改変されたために、井戸跡は郭面が削られた斜面上に位置している。そのため、確認した井戸側3段ともに、井戸の中段部にあたる。現況の上段は半分以上が欠損し、遺存状態の良い中段には、内部に土砂が堆積している。

井戸側（中段）は、凝灰岩を割り貫いた円筒形をしており、外径126cm、内径97cm、厚さ15cm、高さ90cmを測る。上段の井戸側下端部は、内側をL字状に幅9cm、高さ2.5cm削り込み、外側に幅約5cmの段を作り出している。その受け手となる下段の井戸側は、段を内側に作って組み合わせる仕組み（第4図-7）である。上段の井戸側内面には、長さ30cm、幅10cmを測る長方形の切り込み加工（第4図-6）が2箇所認められ、切り込み上部は厚さ3cmを測るが、下部に向かうにつれ浅くなり、最下端で井戸側内面と面一となる。

水ノ手門外側の井戸跡（第2-6～9図）

鶴ノ丸東部の水ノ手門外側に位置する。周辺は南北方向の帯状の平坦面が階段状に連なっており、井戸跡はその最下面の北端にある。現況は埋められずに、簡易な覆屋が建てられている（昭和30年代以降）。

井戸跡は、凝灰岩を割り貫いた井戸枠2段、その下部に河原石等を積み上げた石組の構造（第2図-8）である。井戸枠は円筒形で、外径135cm、内径115cm、厚さ10cm、高さは上段85cm、下段30cmを測る。現況の深さは、井戸枠上面から、水面まで3.9m（標高約34.4m）、底まで5.4m（標高約32.9m）である。割れが複数箇所に確認でき、その割れた石同士の目地に表土が流れ込むことで、ずれが生じており、また、凝灰岩に内包する角礫が多く露出し、その抜けがクレーター状を呈する等、遺存状態は著しく悪い。

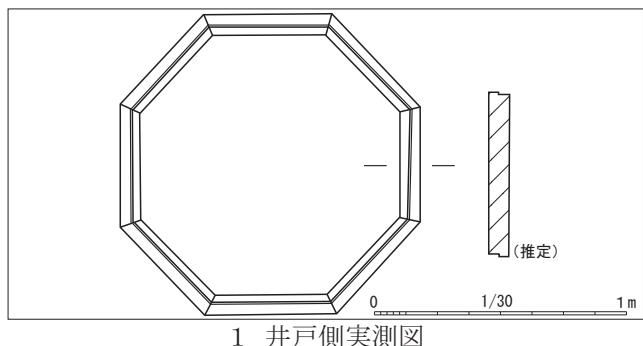
平成14年度には井戸跡周辺を対象とした発掘調査〔石川県金沢城調査研究所2008〕が行われており、凝灰岩製の井戸枠は近世末期以前に遡らないことを確認している。また、井戸が掘り込まれた平坦面の外周石垣は、金沢城石垣編年3期（元和）の創建で、5期（寛文）及び7期（文化）の修築を経ており、その際には井戸にも手が加えられた可能性がある。なお、『三壺聞書』〔石川県図書館協会1972〕、『高石垣等之事』〔日本海文化研究室1976〕等の文献史料では、「ちゃちゃ」という女性が水を汲んだ池として、「ちゃちゃが池」と呼ばれたとの記載や3代藩主利常の母寿福院の御膳水として、「御乳母之池」と呼ばれていたと記してある。（宮川）

2. 発掘調査で検出した井戸跡

三ノ丸第1次 S E 01（第5-1,2図）

公園整備による建物建設工事に伴う発掘調査〔県教委・（財）県埋文センター2002〕で検出されており、調査地点は三ノ丸北東部に位置し、城内の「御鉄炮所」が置かれていた場所である。調査では2段の井戸側（第5図-2）と、1間×2間（東西約2.3m、南北約2.8m）の覆屋建物の礎石が検出された。井戸側は外径130cm、内径95cm、厚さ18cm、深さ1m以上を測る。凝灰岩割り貫きのほぼ垂直に立つ円筒形を呈し、上端部は内側が一段高くなった小段を巡らせる。下段の井戸側との組み合わせ方法は薪ノ丸の井戸跡と同様な形態と推測する。

江戸期の絵図にはこの地点に井戸は描かれておらず、軍隊期の図にほぼ同じ位置に井戸が記されていることから、近代以降の井戸である。



1 井戸側実測図



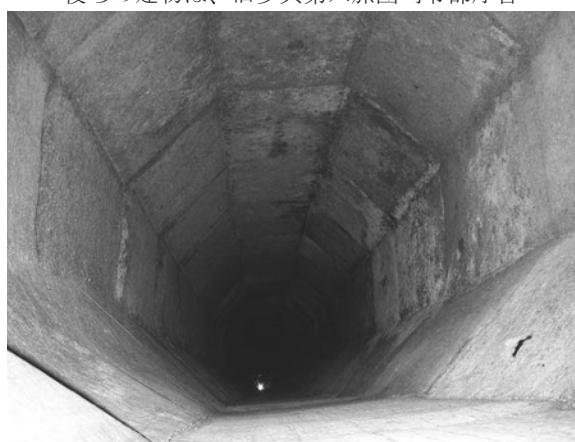
3 井戸側上端部
外側を削り込み、段を作り出す



5 敷石材の状況



2 井戸跡の現況
後ろの建物は、旧歩兵第六旅団司令部庁舎



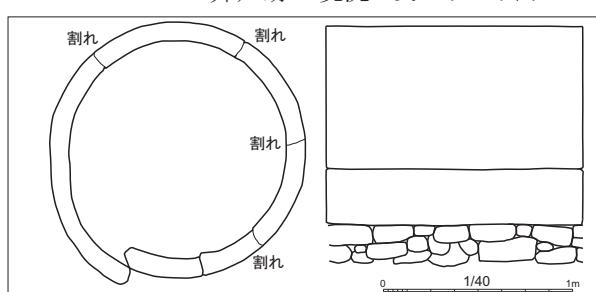
4 井戸跡内部
板石を組み合わせ、複数段積み上げ



7 井戸枠 (上段) 内面
風化が著しく、石材の割れが目立つ



6 井戸跡の現況 奥は水ノ手門



9 井戸枠・側略測図

第2図 現存する井戸跡 (数寄屋敷・水ノ手門)



8 井戸跡内部
上2段は割り貫き材、下部は石組



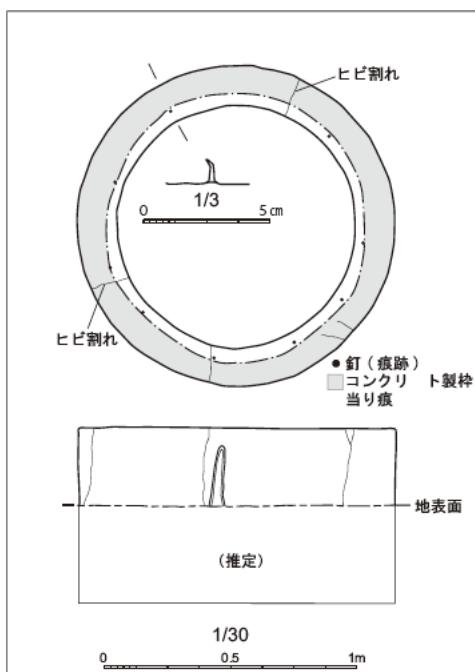
1 井戸跡遠景
玉泉院丸庭園の整備が進む



2 井戸側上面 (部分)
近代以降、石製井戸側の上部にコンクリート製枠が設置される（現在撤去）
コンクリート製枠を固定するための角釘及びその痕跡を約 10箇所、その外部に枠当り痕を確認



3 固定釘



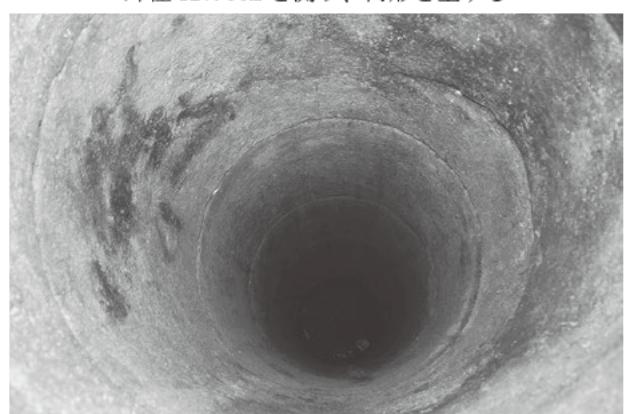
4 井戸側実測図



5 井戸側上面
外径 127.5cm を測り、円形を呈する



6 井戸側側面
ヒビ割れが 3箇所程度、確認できる



7 井戸跡内部
円筒形の割り貫き材を複数段積み上げ

第3図 現存する井戸跡（玉泉院丸）



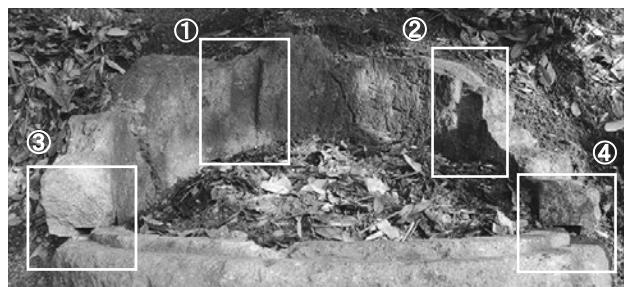
1 井戸跡遠景
近代に造成された「いもり坂」の脇、斜面上に立地



3 井戸側上面
中段の井戸側で外径 126cm を測り、円形を呈する



4 井戸跡側面
最上段の井戸側は、風化等により割れ、東側上部・西半部は欠損。側内に多量の土砂



5 最上段の井戸側内面
①～④の加工が確認できる



2 井戸側側面
現況で3段確認でき、中段の高さは90cm



6 ①方形状の切り込み加工
下部に向かい浅くなり、最下端で面一
②も同様の加工



7 ④上・下段の組み合わせ加工
削り込んで、内・外部に段を作り出す
③も同様の加工

第4図 現存する井戸跡（薪ノ丸）

三ノ丸第2次 S E 0 1 (第5 - 1, 3, 4図)

公園整備による建物建設工事に伴う発掘調査 [金沢城研究調査室2006] で検出されており、調査地点は三ノ丸北東部、上述した三ノ丸第1次調査区のすぐ南に位置する。河原石とみられる自然石を積んだ井戸側 (第5図 - 4) で、確認面の高さは標高41.66mである。規模は掘方上面で直径180cmの略円形を呈し、内径90~95cmを測る。深さは60cm程度掘り下げたのみで井戸底は未確認である。長軸20~30cmの長楕円を呈する円礫や亜円礫を使用し、小口を内面に向けて積む。17世紀後半頃に設けられたと推測される「与力番所」の建物の中になることや出土遺物から17世紀中頃以前の井戸であることが知られる。

河北門 S E 0 0 1 (第5 - 5, 6図)

河北門調査区の南西部で検出された井戸 [石川県金沢城調査研究所2011] で、確認面の高さは標高42.40mだが、上部は搅乱をうけており、本来の掘り込み面の高さは不明である。平面の規模は南北170×東西180cmで円形を呈し、深さは220cmまで確認するが、井戸底には達していない。土層断面 (第5図 - 6) から井戸側を伴う構造と推測され、井戸廃絶時に抜き取られたとみられる。検出時に確認した抜き取り跡の平面形状から円形を呈する井戸側であった可能性が考えられる。掘方壁面は、確認面から - 40~50cmまでは若干上端に向かい開いており、以下はややオーバーハングした箇所もあるが、ほぼ垂直に立ち上がる。壁面には掘削時の工具によると推測される痕跡を確認している。

寛文8(1668)年の「加賀国金沢之絵図」には三ノ丸内に5基の井戸が描かれるが、本遺構の検出位置に井戸はなく、後々もこの位置に井戸は描かれない。一括廃棄状態で出土したいぶし瓦から、廃絶年代は17世紀後半頃に位置づけられる。

河北門 S E 0 0 2 (第5 - 7図)

河北門調査区の西端中央部に位置する [石川県金沢城調査研究所2011] 。調査では遺構検出と調査区壁面で確認できる上層部分の土層観察を行っているのみで、井戸の構造等は不明である。

検出した規模は南北305×東西残存値280cmで、大量の炭が同心円状に入っている、火災によるごみの廃棄がなされた可能性がある。河北門最終段階の路盤が標高42.5mで確認されており、それよりも高い42.85mから埋め戻されていることから、路盤が埋められた時(明治14年頃)もまだ井戸は開放していたことがわかる。

遺物から年代は特定されていないが、17世紀後半をはじめとして幕末に至るまでの複数の絵図に河北門西側のほぼ同じ位置に井戸が描かれており、これがS E 0 0 2であったと考えられることから遅くとも17世紀後半には構築されていた井戸であろう。

3. 原位置から移動した井戸材

旧金沢大学教養部(新丸)(第6図)

青戸室石製で円筒形を呈する割り貫きの井戸枠である。平成3年度に金沢御堂・金沢城調査委員会による金沢城跡主要遺構等実態調査時には、金沢大学教養部中庭(新丸)に置かれ(第6図 - 1)ていたが、原位置であったのか等の詳細は不明である。その後の公園整備に伴い、藤右衛門丸に移動されていた。

井戸枠は外径160.5cm、内径106.5cm、高さ76.5cm、厚さ27cmを測り、重厚な作りである。外形は胴部が膨らむ筒形を呈し、内面はほぼ垂直になっている。一端に56cm程度の幅で平坦に仕上げられた面(第6図 - 4)がある。下端部は、内側が11cm程の幅で約1.5cm低い小段(第6図 - 5)となり全周してあり、下に設置する材と組み合わせる仕組みになっている。内外面ともに平刃状の工具により丁寧な加工がされる。特に上端部から側面上部20cm位にかけては磨かれており、特に丁寧な仕上げとなっている。(西田)

旧金沢大学職員会館(数寄屋屋敷)(第7・8図)

平成3年度に金沢御堂・金沢城調査委員会が実施した現地調査時に撮影した、金沢大学職員会館前に置かれていた井戸枠の写真(第8図 - 12)がある。それ以前は職員会館建替前の生薬学教室時代を



1 調査区全景 (三ノ丸第2次)
手前の建物下が三ノ丸第1次調査地点、
奥は石川門



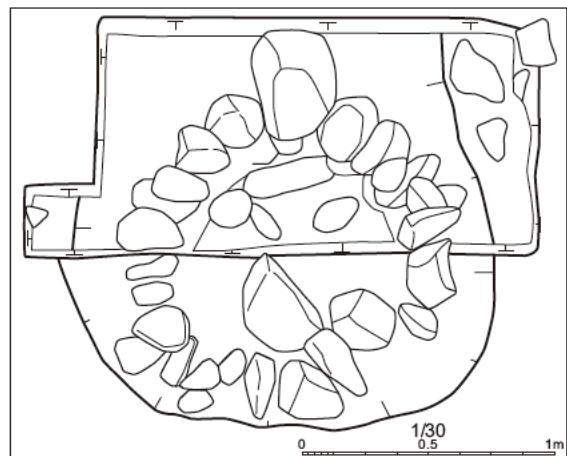
2 井戸跡 (石製割り貫き)
(三ノ丸第1次 SE01)



5 河北門 SE001
井戸側は抜き取られ構造は不明



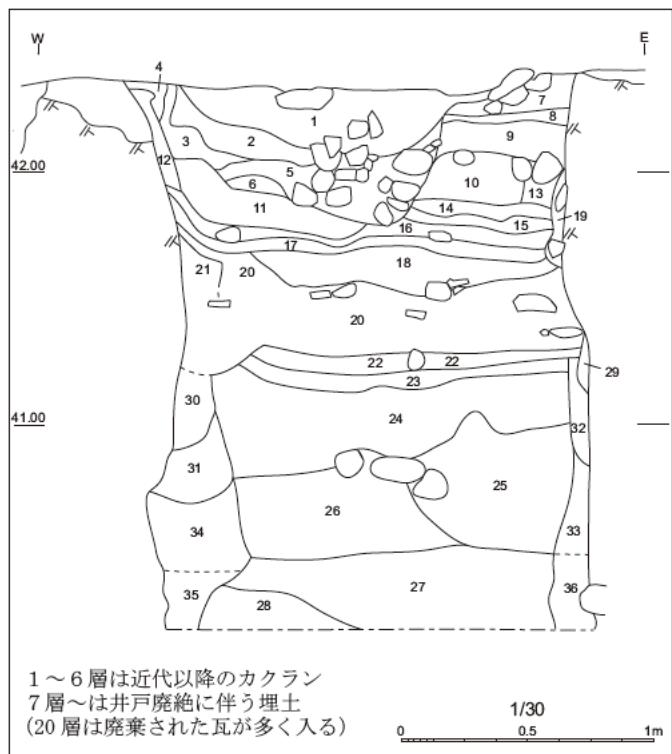
7 河北門 SE002 プラン確認状況



3 井戸跡 (石組) 実測図
(三ノ丸第2次 SE01)



4 井戸跡 (石組) 検出状況
(三ノ丸第2次 SE01)



1～6層は近代以降のカクラン
7層～は井戸廃絶に伴う埋土
(20層は廃棄された瓦が多く入る)

第5図 発掘調査検出の井戸跡 (三ノ丸)

撮影した写真（第8図-13）[金沢大学50年史編纂委員会1999]に、同一の可能性がある井戸枠が外壁際に立て掛けるように置かれており、その当時既に移設されていたことが分かる。現在は前述のとおりの上部に移設（第7図-1）されている。

井戸枠は、赤戸室石を割り貫いた円形を呈するが、内面下部は八角形（第7図-3）となる。外径139.5cm、内径103.5cm、高さ73cm、厚さ20cmを測り、下端の八角形は一辺42cmである。上面端部は面取り加工により丸みを帯び、外形は中央部分がやや膨らんだ筒形を呈し、内面はほぼ垂直になっている。外面は下端部を幅10cmでL字状に削り込む（第7図-5）。これは枠周囲に設置される敷石を当て込むための加工と考えられ、下端面は平坦である。外面の加工痕は上端面及び側面上半部は風化で不明確だが、側面下半部では細かい鑿加工痕がみられ、特に下端部は平刃状の工具により丁寧に仕上げられている。

側面には柄穴が3箇所確認でき、その内2箇所は2孔で対になり、対面する位置に穿たれている（第8図-6,8）。孔の大きさは概ね9×4cmを測る。内部は磨滅した円礫等の様々な混和材を含む可塑性の素材で埋められ（第8図-9）ており、奥行き（厚さ）は不明であるが、内面までは貫通していない。もう1箇所は大きさ4×3.5cmを測る単独の孔（第8図-7）である。2孔1対の柄穴とは異なり、円礫を含まない細かい砂粒を多く含む素材で埋められ（第8図-10）ている。やはり奥行きは不明で、内面までは貫通していない。周囲には部材の当り痕が認められる。これらの柄穴は井戸の上屋構造を設置する際に穿たれ、その後、改修時に埋めて補修されたものと考えられる。その他、鉄製部材の痕跡（鉄サビ及び当り痕）が対面する形で確認でき、上屋構造等に関係する可能性がある。

旧歩兵第六旅団司令部庁舎（数寄屋屋敷）（第9図）

旧歩兵第六旅団司令部庁舎裏にあり、板石組八角形井戸跡（）の隣に置かれている。本資料はかつて二ノ丸南部の草地に散在していたもので、公園整備が急ピッチで進められていた平成12年頃に、これらを集めて新補材1石を加えて、現在地で組み立てられたものである。

井戸枠は、赤戸室石の板石を8石組み合わせた円筒形（第9図-3）をしており、外径126cm、内径92cmを測る。また、下端から約1/3辺りに、やや膨らみを持つ形状である。1石の寸法は内幅33~43cm、外幅43~54cm、高さ77cmを測り、部材の横断面は内・外面が湾曲した扇形を呈する。上部外側は幅7.5cmの範囲を1cm程度削り込み（第9図-2）、その周囲には鉄錆が確認できることから、鉄板等でたが締めして部材を固定していたと考えられる。また、下端部は内側が8cm程の幅で1cm削り出し、内側に段を作り出している。枠の上端部は内外の縁を面取り加工によりやや丸みを帯びるよう仕上げている。（宮川）

4. 絵図中の井戸（第10・11図）

参考として、江戸期や近代の位置をみてみる。図示したのは江戸後期の城内建物配置図の「御城中壹分碁絵図」（文政13年）である。この絵図では城内22箇所に井戸が描かれており、その表現は2タイプある。A：井桁状のものと、B：丸い井筒を思わせるもので、別の絵図では、逆に描かれていたり、全て「井」と表記されていたりするので、井戸以外の施設などではなく、地上部の構造の違いにより描き分けられたと思われる。その場合は、Aタイプは井桁を組んだ井戸枠、Bタイプは・のような割り貫きの井戸枠であったと推測する。

軍隊期の絵図にも「井」と書かれた施設が21箇所あり、「壹分碁絵図」の井戸と位置が重なるものが8箇所ある。新設したとみられる井戸も含め、兵舎や浴室や炊事場などの施設近くにみられる。

今回報告した、～・は壹分碁絵図に、は軍隊図に対応する井戸がみられる。一方、・のように絵図には描かれない井戸跡があることも興味深い。

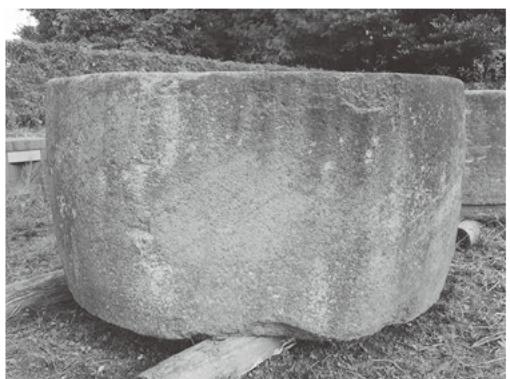
このように2枚の絵図を比較しただけでも、一旦掘削された井戸は長期間にわたって存続する一方で廃絶や新設も行われていた様子を垣間見ることができる。今後、絵図表記を年代ごとに整理し、遺構と比較検討することにより、井戸の変遷や構造、城郭整備との関連性などを探る手掛かりが得られるものと期待される。（西田）



1 平成3年当時の状況
後ろの建物は金沢大学教養部校舎



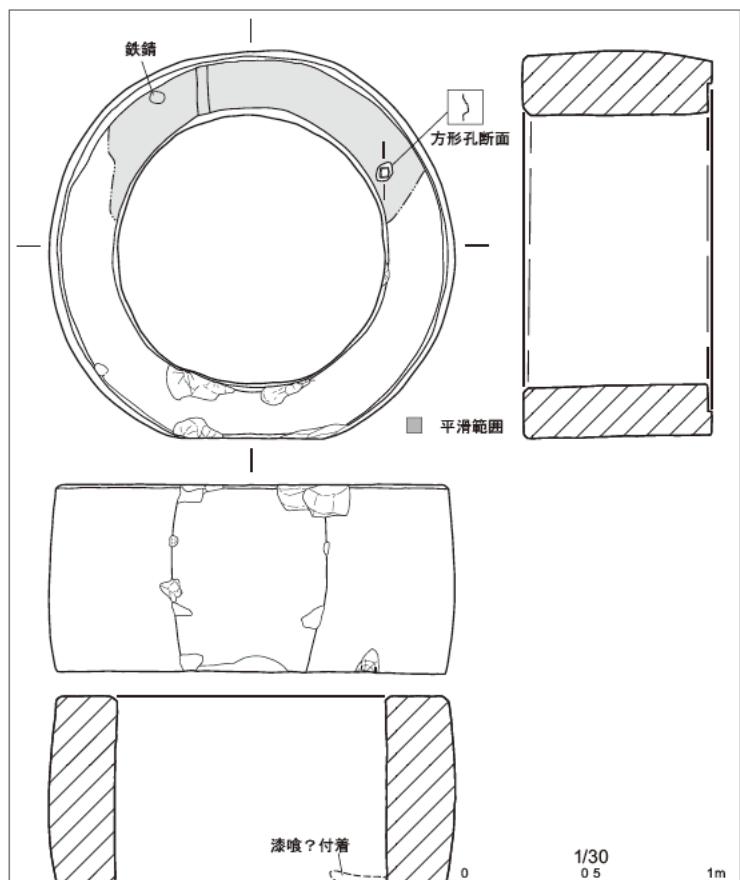
3 井戸枠上面
一部が磨いたような平滑面あり



4 井戸枠側面
円形状の一部を平坦に加工



6 井戸枠上・側面



2 井戸枠実測図



5 井戸枠下端部の状況
内側を削り込み、段を作り出す

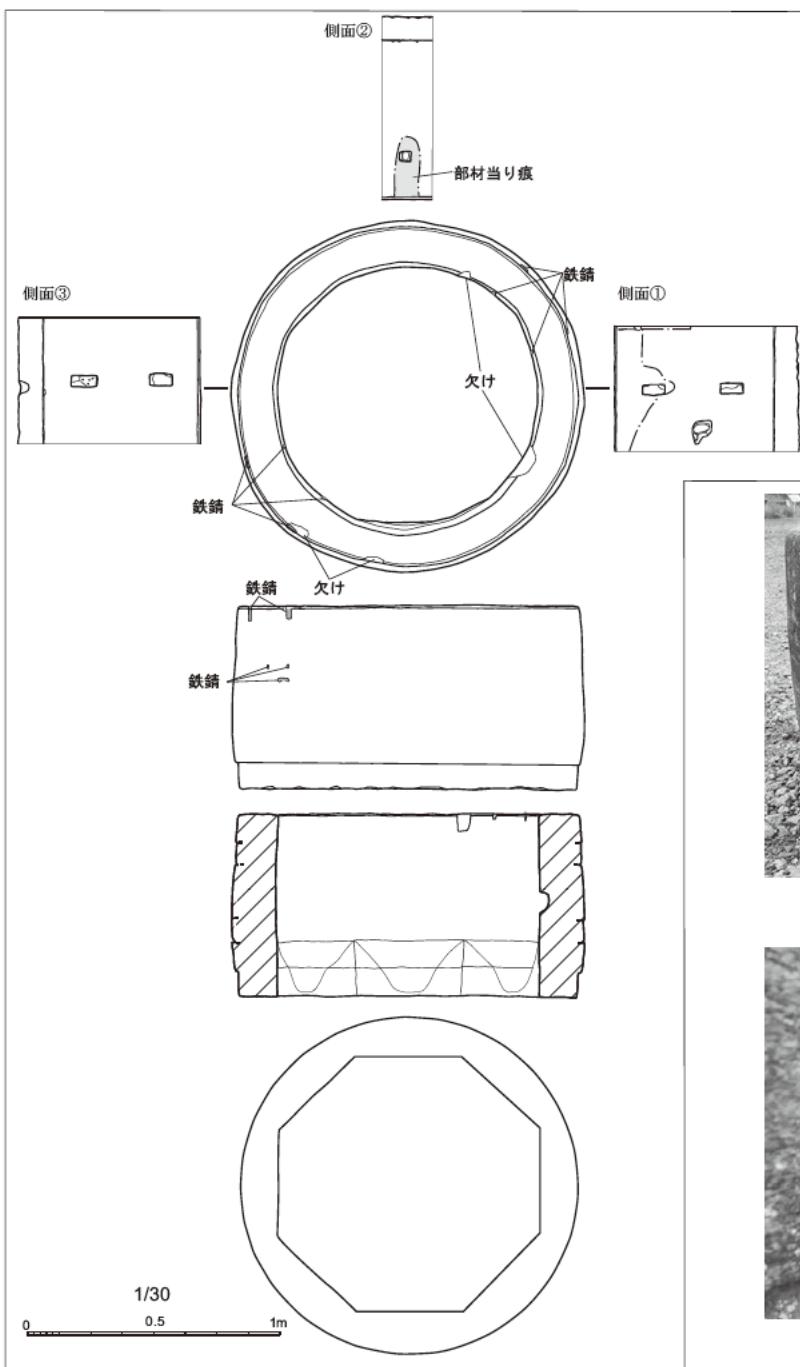


8 井戸枠側面
全体的に平滑だが、上端から約20cm程は特に
磨かれ、丁寧に仕上げられる

第6図 井戸枠（旧金沢大学教養部中庭）



1 井戸枠の現況
玉泉院丸（②）に移設後



2 井戸枠実測図

第7図 井戸枠（旧金沢大学職員会館前） 1



3 井戸枠上・下部
上部は内外面ともに円形、下部は内面が八角形



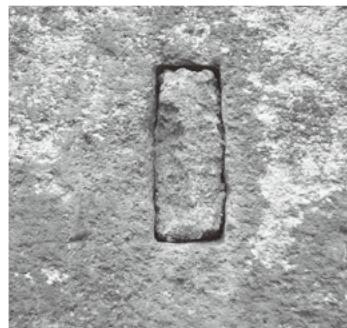
4 井戸枠側面
中央部分に膨らみを持つ形状



5 井戸枠側面の下部
端部を幅10cm削り込む



6 井戸枠側面①
枘穴2孔 側面③と対面する



9 側面①の上部枘穴
9×4 cmを測り、可塑性の素材
で埋められている



10 側面②の枘穴
4×3.5cmを測る単独の孔



7 井戸枠側面②
枘穴1孔、孔周囲に部材当たり痕



8 井戸枠側面③



11 井戸枠の旧位置 (S=1/1,000)



12 平成3年当時の状況 (建物配置図★)
後ろの建物は旧金沢大学職員会館



13 職員会館として使用される前の生薬学教室時代
(～昭和30年前半) の写真。建物の壁際に井戸枠
（『金沢大学50年史 部局編』より転載・加工）

第8図 井戸枠（旧金沢大学職員会館前）2



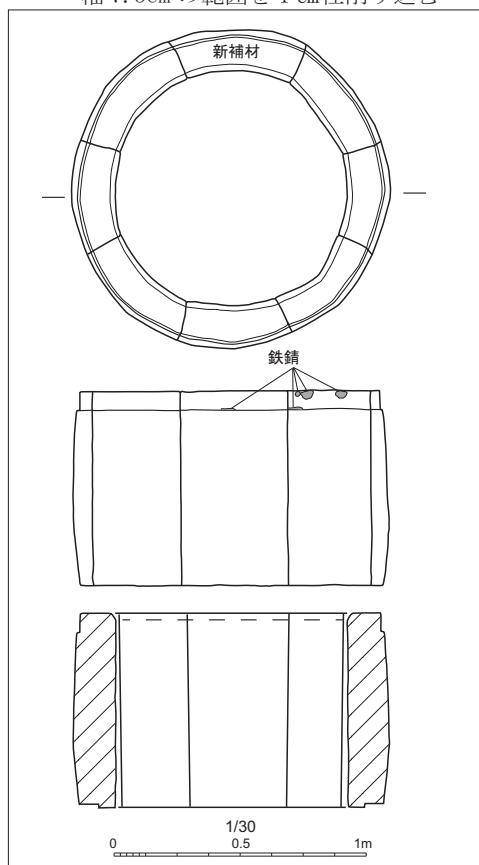
1 井戸枠の現況
後ろの建物は旧歩兵第六旅団司令部庁舎



2 井戸枠上部
幅 7.5cm の範囲を 1cm 程削り込む



3 井戸枠上面
全体的に平滑、外・内端部はやや丸み（面取り加工）
を帯びる



4 井戸枠側面
現況は板石が互いにずれており、全体形は歪む



6 井戸枠内面
板石の形状は下部が狭い台形を呈する

第9図 井戸枠（旧歩兵第六旅団司令部庁舎裏）

おわりに

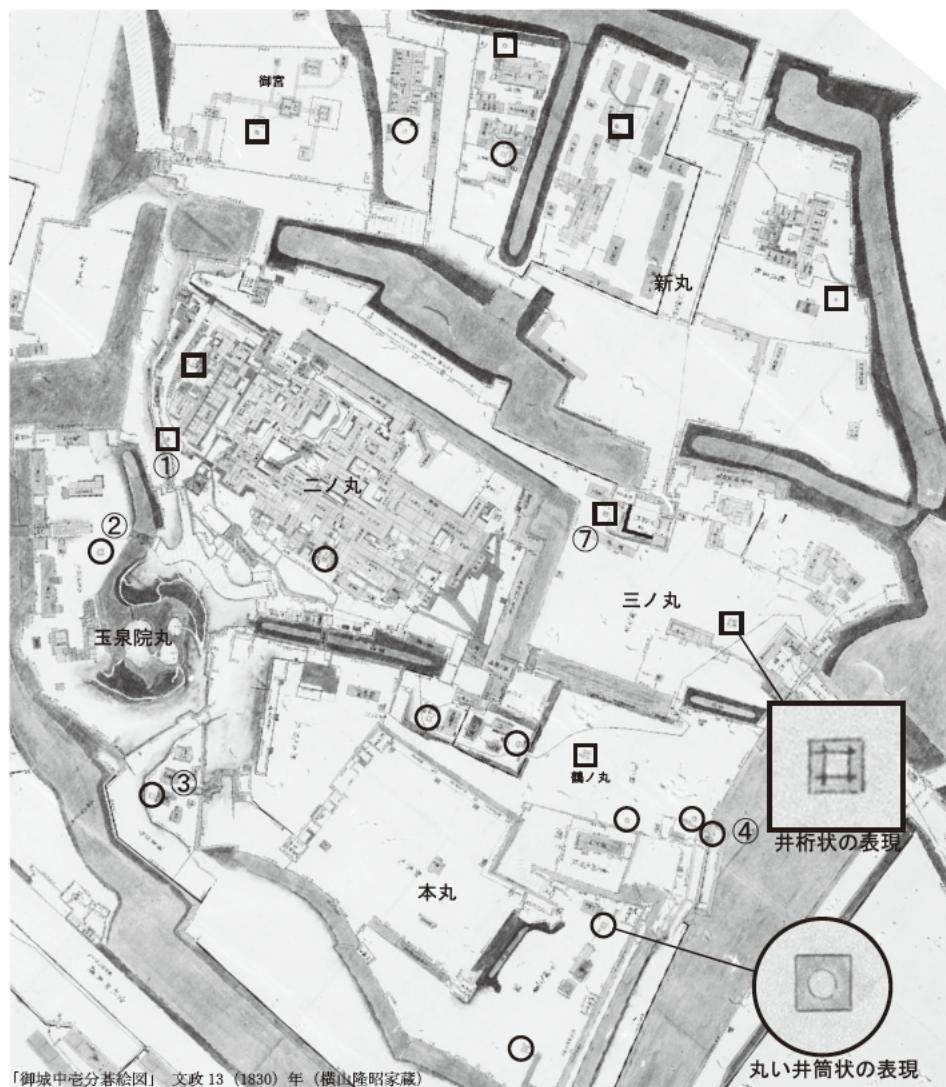
本稿紹介の井戸材は全て石製であり、安山岩（戸室石）もしくは凝灰岩（鷹巣石等）、河原石が使われており、形態は石材を割り貫いた円筒形、板石を組み合わせた円筒形と多角形、河原石の石組の3種類となる。また、安山岩は割り貫き及び板石を組み合わせた枠・側にみられるが、凝灰岩は割り貫きのみであり、素材による使い分けがあった可能性がある。材の寸法については、内径が95cm前後と105cm前後の2つに大別できることから規格性があったものと考えられ、概ね前者は凝灰岩、後者は安山岩の傾向にある。

これら以外にも、現状変更に伴う工事立会で4基（数寄屋屋敷、御宮東部、鶴ノ丸廐跡、いもり坂口）を確認しており、明治11年（1878）撮影の古写真〔学習院大学史料館2006〕には、三ノ丸の中央部において、釉薬瓦を葺いた覆屋を伴い井桁が組まれた井戸がみえ、金沢大学教育学部校舎敷地（鶴ノ丸）工事中には井戸材・形状が不明確な井戸が発見された〔金沢城跡学術調査委員会1967〕。絵図史料を参考にすると、さらに多くの井戸跡が地下に埋没しているものと考えられる。

金沢城内にある井戸の全体像に迫るためにには、より一層の資料の蓄積を待つ必要がある。（宮川）

参考文献

- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002『金沢市 金沢城跡 - 三ノ丸第2次調査 新丸第2次調査 -』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006『金沢城跡 - 三ノ丸第1次調査 -』
石川県金沢城調査研究所2008『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書』
石川県金沢城調査研究所2011『金沢城跡 - 河北門 -』
石川県図書館協会1972『三壺聞書』
宇野隆夫1982「井戸考」『史林』65巻 史学研究会
学習院大学史料館編2006『写真集 明治の記憶』吉川弘文館
金沢城跡学術調査委員会編1967『金沢城 - その自然と歴史 -』金沢大学生活協同組合出版部
金沢大学50年史編纂委員会編1999『金沢大学50年史 部局編』金沢大学創立50周年記念事業後援会
日本海文化研究室編1976『金沢城郭史料 - 加賀藩穴生方後藤家文書 -』石川県図書館協会



第10図 絵図に描かれた井戸



第11図 軍隊期の井戸